



小池 光選

白壁に鉛筆で描いた巨大蟻おもしろいとて母は  
残しぬ  
【評】こどものころの思い出。白壁いっばいに落書きしたのだが、母は叱らず、おもしろいと残してくれた。見識がある。その母も、落書きした白壁も、今はもうないのである。新聞をめぐる音ふと止む車内男は歌壇のページ見らるし

東京都 浅倉 修

【評】朝の通勤電車の車内風景。新聞のページをめぐる音が止み、なにかの記事に見入る様子。きつと歌壇の歌を読んでいるに違いない。一種の希望の観測だが、あり得る。

相棒の猫はこの世の舞台から去りて心のともしびとなる

【評】老衰の愛猫は、ついにあの世に旅立ってしまった。相棒の猫、がよく感じがていて。この世で唯一の相棒だった。

「草枕」「二百十日」に「野分」へと読み次ぎきたり庭の梅咲く

東京都 市川 澄子

ことどもらはトキョブギバギと歌ってた進駐軍と手を振り合って

町田市 岩本 房子

夕闇の緑陰深く四万十川音なく流るわれに迫りて

吹田市 鈴木 基充

自家製野菜たべてゐるから若いねとうれしきこと言ふ女孫十一歳

藤枝市 北泊あけみ

公営の墓地の抽選はつれなり「補欠六番」と通知は来たが

仙台市 岩間 啓一

三歳の孫が歌いし「春よ来い」能登の被災地へすく届けたい

仙台市 鈴木 武志

帰ったらママにあげると握り締むたんぽぽ揺れるパパとの散歩

香取市 清水 和子

栗木 京子選

山里の大雛祭りを巡りゆく老若男女に降るスギ  
花粉  
【評】町や村をあげて大がかりな雛祭りを開催するところが多い。多彩な雛飾りを見て回るのは楽しいが、折しも花粉の飛び交う日々である。結句で現実を引き戻される一首。

山松市 宇和上 正

【評】ボードに家族がそれぞれの予定などを書き込む。手書きなので字の癖は一目瞭然。共に暮らしても字が似るとは限らない。字の癖とは不思議なものだ、とあらためて思う。手仕事を途中のままに残しておくこの気楽さはいかに生まれし

松山市 山田 好司

【評】途中のまま残しておくのはだらしがない気がするが、咎める人がいなければ大丈夫。マイペースの気楽さが「幸」から伝わる。

三極の枝の先には花群れて濃淡の黄に詰まる温もり

さいたま市 春日 重信

進化するゴジラの如く鉄骨がドカンドカんと空へ組み上がる

盛岡市 吉田 澄江

門口に「自由はどうぞ」とお裾分けミモザの幸せもう溢れている

奈良県 藤本 京子

きみの肩でミモザの枝が春たよと囁くならばそれが春だよ

相模原市 岩瀬 夏子

妹が難関大に受かった日桜の開花宣言を聞く

奈良市 辻風 文尊

ひと気なき春野を行けば夕暮れてたしかな予報に降り出す雨は

横浜市 芳垣 光勇

若人と共に操作を学びけり新システムの電子力ルテの

箕面市 手島 愛雄

俵 万智選

芽のやうな寝癖をつけて浅春の街ゆく早足のサ  
ラリーマン  
【評】まだ新人で寝坊でもしたのだろうか。寝癖の「芽」という素敵な比喩が、浅春と縁語のように響きあって、初々しい。

小諸市 藤 雪陽

【評】励ましの言葉への反論だろう。今回だけではなく、これまででも負けてきたことを伝えつつ、ユーモアのある返しがいい。

「トムとジェリー」が「ジェリーとトム」で無  
いようにいつもあなたは右手を握る

四街道市 かきもちり

【評】たいした違いはないけれど、逆だとなんだかしっくりこない。左手ではなく右手を握る習慣をとらえた上の句のたとえが、ユニークで説得力がある。

コンタクトレンズを外せば見たくない世界を入  
れておく皿になる

越谷市 あきやま

若者をZ世代と呼ばないでまるで世界が終わる  
みたいに

上尾市 関根 裕治

好きそうな味だ、と思う日曜のやけに明るいつ  
ードコートで

八王子市 吉村のぞみ

勾玉のようにあなたの耳はあり春のピアスを選  
んであげる

川崎市 からすまあ

せかせかと指先で押すスキップは子供の頃のスキ  
ップじゃない

東京都 富見井高志

失恋も手術も一回めだとしても傷つくことは初  
回と同じ

堺市 一條 智美

三田市 藤原栄美子

黒瀬 珂瀾選

山茶花の蒼のみつつ解れゆく遅速ありたり一輪  
挿しに  
【評】本当に小さな世界を見つめている。小さな枝についた三つの蒼。その開きゆく様子に早い遅いがあるという。私たちが生きる世界の「美」は、こんなところに宿るのかも。

東京都 杉中 元敏

【評】幼子は嘘をつくものだ。親としてはそれが分かっていても、少し悲しいし、どろりとした怒りが湧く。それは大きな古代魚が身をひるがえすような、こころの動きなのだ。

一歳で歩き覚えしわれなるに「歩き教室」に妻  
と通へり

横浜市 大建雄志郎

【評】人間の一生、という長い時間を端的に表現してみせた一首。でも、その傍らに「妻」が居ることに不思議な安らぎがあります。

地震過ぎて棚田も島もかはり果てかはらぬものは能登に降る雪

高崎市 枝窪 俊夫

軽作業してあしころの事業所のOB会に行く春の昼

八王子市 土屋ひろ菜

父母が静かに逝ってくれるまで専業主婦の名札  
下ろせず

枚方市 坊 真由美

啓蟄にゴルフの中も騒ぐらし寛解の夫らライン  
を交わす

新発田市 片山恵美子

会はぬ間に老けたる我を探しつつ友が出てくる  
駅東口

安中市 田口 明子

決められたレールに乗ったと嘆く君よ乗ると決  
めたる自分がいるのに

川口市 野沢 共子

記念日を忘れ上手の君がいて忘れたふりの我が  
住む家

佐賀市 中野 和美

次回は16日(火) 掲載予定

◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。  
◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌(俳)壇、  
〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから。右の影絵ははなまつり